



# フェローシップ・ニュース

## 38号

# 迎春

新年明けましておめでとうございます。

アパリも激動の一年でした。著名な芸能人の薬物事犯の逮捕に伴い、過激なマスメディアの取材攻勢に翻弄された年でもありました。

また、私たちアパリの国際協力活動が開始されました。フィリピンの貧困層の薬物依存者の草の根支援及び、ダルクの回復者たちとともに、このミッションが始まりました。

不思議なことに、私たちはお金がありませんが次々と活動の輪が日本だけでなく海外にも広がってまいりました。これは私たちの力だけでなくアパリを支えてくれている恩人たちのご協力の賜物だと思っております。

深く感謝と敬意を申し上げ、新春のご挨拶とさせていただきます。

また、昨年アパリの理事に就任なされた横田尤孝先生におかれましては最高裁判事にご就任なされ、私たちアパリの誇りです。任期は5年と聞いておりますので任期満了後はぜひ先生の帰巣本能に期待し、アパリ職員理事一同心よりお待ち申し上げます。

寒さ厳しい折、皆さま方におかれましては、くれぐれもお身体にご自愛くださいますようお願い申し上げます。

近藤恒夫

特定非営利活動法人  
アジア太平洋地域アディクション研究所

発行日  
2010年1月1日

APARIとは、アジア太平洋地域アディクション研究所 (Asia-Pacific Addiction Research Institute) の略称です。

全国のDARCやMACの各施設、福祉・教育・医療・司法関係者と連携しながら、依存症から回復しようとする方々を支援しているシンクタンクです。

### 目次：

新年のご挨拶… 近藤恒夫	1
薬物依存とは何か?… 西村直之	2
薬物依存症と家族の対応について… 町田政明	6
「拘置所のタンポポ」 ご紹介	7
入寮者からのメッセージ… ヨッシー	8
藤岡ニュース! 東京本部より	10
マック・ダルククリスマス会、回復パレード	11
司法サポートのご案内 家族教室日程表	12



横田尤孝氏は、2009年12月でアパリ理事を辞任しました。2010年1月より最高裁判所判事に就任します。

第2回薬物依存症者回復支援セミナーより(2009/11/14 川口メディアセブン)

## 薬物依存とは何か？ 薬物依存のメカニズム

NPO法人リカバリーサポート・ネットワーク 西村直之

まず、薬物依存は、関わる人が、どのようなプロセスの段階でどういう人たちと会っているのか、その人たちはどのように動いているのかを理解しておく必要がある。そうでないと関わる人たちの間で話がバラバラになってしまう。

図2(薬物問題の進行過程)の円の大きさは、人数、つまり母数を表している。最初は、機会的使用。この人達は、たまに使い、基本は中断している。多くは、そのうち止めてしまう。シンナーを一度使った人が、ずっとシンナーを使っていたら世の中シンナー使用者だらけですから。覚せい剤でも同じ。機会的使用者は、たぶん覚せい剤でも100万人以上はいると思う。全ての依存性薬物の使用者を加えれば、人口の1割か2割になるかもしれない。

機会的に使う人の多くは、そのまま止めてしまう。中断・再開の繰り返し、使用機会の増加などを経て、日常的に使う段階になったら日常使用。医学的に言えば薬物乱用となる。機会的使用から日常的使用に移行するあたりから、薬物乱用として問題が表面化し始める。

薬物問題では、機会的使用のレベルでも一度中断した人が、次に使用を再開すると日常的使用にレベルアップしやすい特徴がある。日常的使用のレベルに進行すると、中断しても機会的使用のレベルには戻りにくく、むしろ中断後の再開によって問題レベルが深刻化することが少なくない。より強迫的な使用になり、歯止めというかコントロールが効かなくなりやすい。間を空けて使えばいいだろうと思いつつ、中断・再使用によってレベルアップしてしまうというのが、薬物の罠でもある。そして気がつく頃には強迫的使用という状態になっている。強迫的使用レベルは、薬物依存と呼ばれている。自分ではちょっとくらいならいいだろうと使おうと、止められなくなる。使い始めると時間的コントロールがきかない。強迫的使用になると、自己中断が極めて難しくなる。

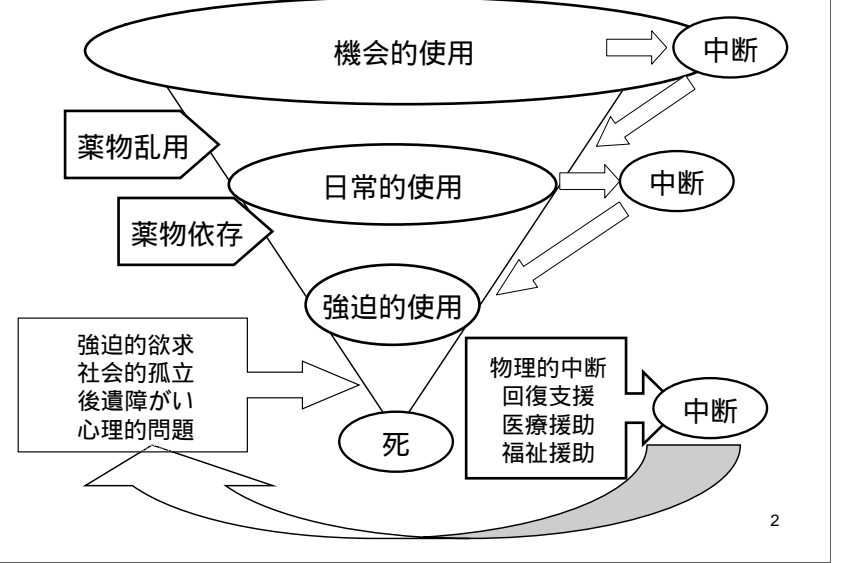
強迫的使用の最大の問題は、死ぬこと。身体的に死に至る前に、社会的に死んでしまう。たとえ覚せい剤やシンナーが止まっても、アルコールに依存している人も結構いる。また中断期に鬱状態になる人もいる。薬物使用を止めてもなかなか元に戻れない。その結果、再使用、更なる問題の進行を招きます。強迫的使用のレベルでは、自己中断は難しくなるので、事故や精神病症状が出て強制入院、警察の逮捕などによる物理的中断、回復支援、医療援助、福祉の介入で一時的な中断が手に入る。しかし、物理的中断というのは、回復とは違う。高い再使用率、元気になって再使用してまた入院や逮捕といった回転ドア現象、薬物を使い続けるための医療利用など、中断しても回復支援という流れに乗らなければ、強迫的な欲求、社会的な孤立、後遺症などの前には中断を維持するのは、そう簡単ではない。薬物を止めて初めて直面化する自分自身のストレスの対処能力の問題もある。これらの問題が、中断の維持を難しくし、この悪循環に入り込むと、次の援助に結びつきづらいのも問題です。その結果、再使用を繰り返すほど一層死のリスクが高くなってしまいます。

私が薬物の問題に関わる理由は、死なれたくないから。何をどうしたら、この人たちは死ななくて済むのか？ それこそを考えないといけない。

図3(人が、薬物を使い始める)を。なぜ人はクスリを使うのかについて。

新しい世界への興味、ファッション・流行、仲間からの影響、ストレス回避などがある。学校の中での流行など個人を取り巻く環境、その人が所属する社会、思春期の大人への反抗、どのような仲間とつきあうか、どれくらい

薬物問題の進行過程



人が、薬物を使い始める

1. 新しい物・新しい世界への興味
2. ファッション・流行
3. 社会・大人への反抗
4. 仲間の影響・圧力
5. ストレス回避・現実逃避

1. メディアの影響
2. 薬物の入手しやすさ
3. 薬物を使用する身近な人間
4. 周囲からの関わりと関心
5. ストレス状況

ストレスを抱えているかなど、個人の背景に、メディアの影響、薬物入手のしやすさ、薬を使う身近な人間との出会い、地域など周囲の人間の関わりなどが大きな影響を与えている。メディアでの薬物問題の報道でも、テレビで危険を叫ぶほど、薬物使用が広がる矛盾がある。取り上げる回数が多いほど、大人に対するアンチ・ファッションのイメージが出来上がり、トレンドの「流行」であるというイメージを人に与える。人はイメージに騙され、とらわれやすい。「薬物の流行の危険」という言葉が、「薬物の流行」という部分までしか伝わらない。危険というマイナス部分が伝わらない。皮肉なことに、メディアやマスコミの薬物問題報道で、一番喜んでいるのは薬物の売人かもしれない。「今流行の薬...」の謳い文句で大儲けしている。良いにしろ悪いにしろ、メディアが大きな影響を持っている。薬物問題の介入で考えると、ラジオはテレビより効果的。薬を使っていて電気が止められている人でも、ラジオを聴いている人は多い。それから、薬物使用者は教育チャンネルをあまり観ないから、教育番組で危険だといっても効果はない。娯楽番組の中にスポットでメッセージ入れる方がいい。それでも費用対効果は良くないし、逆に流行を生み出しかねない。このあたりが難しい。

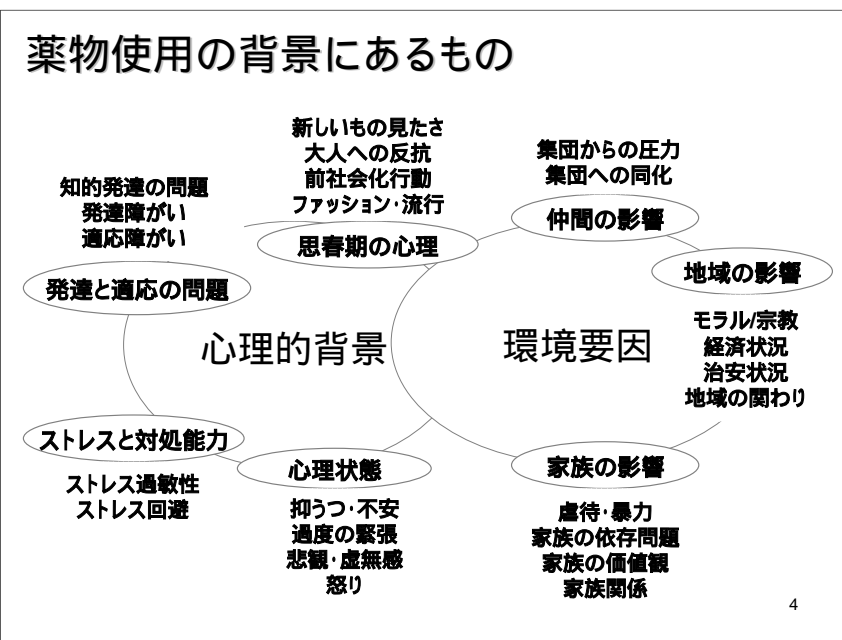


図4(薬物使用の背景)を。薬物使用の背景を、大雑把に分類すると個人の心理的背景、環境要因、言い換えれば、本人の内的な部分の要因と外的な要因に分けられる。心理的背景では、一般的な思春期の心理の問題、知的発達の問題や発達障害や適応の障害などの発達と適応の問題がある。この背景のさらに背景には、幼少期のネグレクト(教育的環境がない、育児放棄)によって生じた知的発達の問題や、発達障害や適応の障害が見落とされ、放置され、ケアが全くされないまま成人になったケースや、育てにくい子どもでありながら、親への介入や支援がな

く、結果的に虐待になっているケースもある。親のアルコールや薬物問題や孤立が、結果として子どもの発達の問題を悪化させている場合も多い。

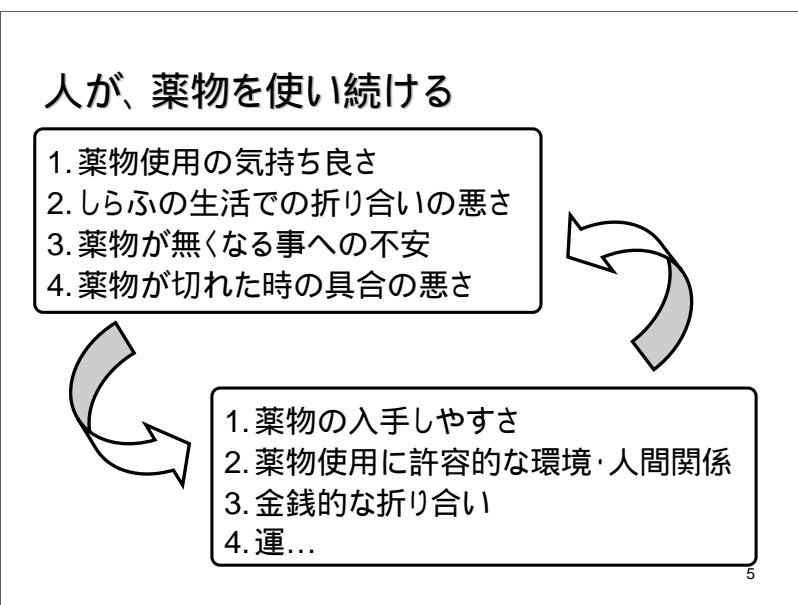
関係者は、薬物の問題を、親、特に母親の子育ての問題として単純に図式化しがちであるが、発達の問題など、基礎的な知識を持っていれば、見極めができるはず。援助職は自分たちが病理を見つけてストーリーを作ってしまう、そのストーリーに酔ってしまい、修正がきかなくなることがある。これが最悪の援助につながる。

個人のストレスとストレス対処能力も背景の一つです。不安耐性が低い人や体質的にストレスに弱い人は、薬物を使うと落ち着くことがある。注意欠陥多動障害を持つ人などは薬物を使うと落ち着く、勉強ができるから怒られないで済むと思ってしまう。個々の心理状態も大切な要素です。本人の心理的な問題、緊張感や悲しみ、怒りを薬物の使用で自己治療しようとする人達も多い。

ただ、これらの心理的背景があっても、みんなが使うわけではない。何が違うのか。ここで大きな影響を与えるのが環境の要因。地域の大人がどのくらい状況に対して関与したか。取り巻く集団がどの程度対処力を持っているか。家族がその問題に対して向き合う力を持っているか。

宗教的な影響でいえば、イスラム教ではアルコールが禁じられているから、アルコール依存症は少ない。しかし、薬物の問題は結構ある。

経済的な状況もある。一般的には薬の問題は貧困層で生じやすく深刻化しやすい。ところが、薬の種類や入手のしやすさによって、お金持ちしか薬が使えない場合もある。コカインの流行は、マンハッタンの金持ちの金融関係者から始まった。安い粗悪なヘロインに替わって、純度の高いコカインが蔓延し始めた。その主流は、年収数千万円の人達で、依存になっても刑務所などの閉鎖環境での治療ではなく、1ヶ月数百万かかるようなケア施設に入って治療する。経済状態によっても、薬物の問題も様変わりする。



都市部は、個人社会。田舎であれば隣人のおかしな行動に気づくが、都会では隣人は見えないし、見ない。覚せい剤を使っている人も、使い始めは家の中もピカピカにして、とてもきれい好きでいい人に見えるかもしれない。都会では、人は多いけれど、誰かが援助が必要な「おかしい」ことに気づくことは少ない。

図5(人が、薬物を使い続ける)を。

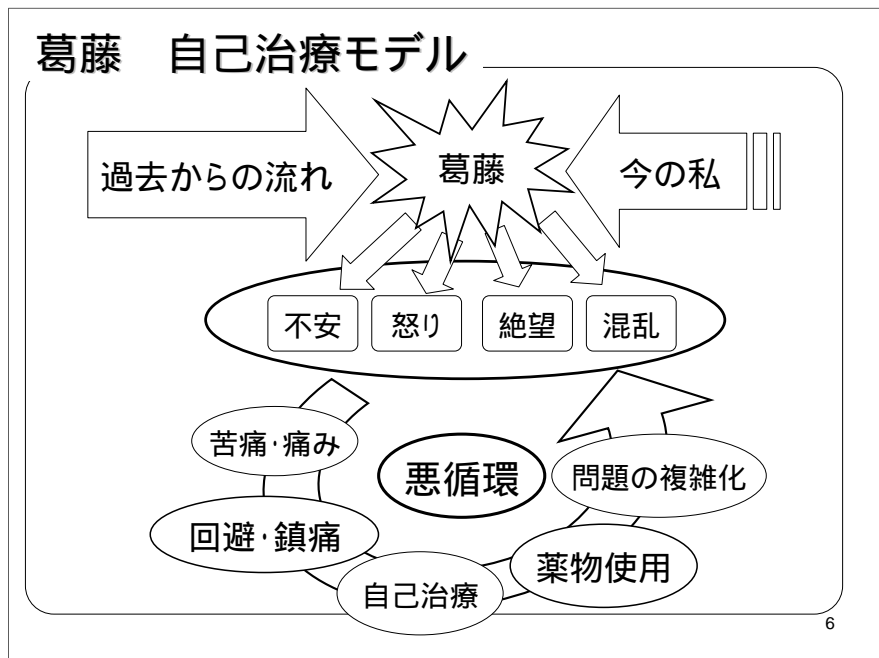
「使い始める」と「使い続ける」は違う。海外旅行に行って、そこで大麻を吸ったというのと、「日本で買いに行きました」という状況は違う。日本であれば「たまたま目の前にあった」といっても、本人が望んでその状況に自分を置いた可能性が高い。選んで薬がある場所に行っている。使い続けるには動機、意欲、努力が必要となる。

薬物使用の気持ちよさも大きい。薬の体験が強烈であればあるほど、その後に素面の生活と折り合いが付き難くなる。「素面で生活すること」と「自分との折り合い」が悪くなると、薬との縁が途切れてしまうことが不安になる。「もう使えないかもしれない」と思うと不安。どうにかして、薬が手に入る様な繋がりを保とうとする。さらには、使い続けると、切れると具合が悪くなってしまふ。それを避けるためにも、手に入るように自分で努力していく。

使用を継続するには、手に入りやすさがどれくらいか、薬物に許容的な環境、人間関係があるかといった要素が問題になる。金銭的な折り合いがつくかという点もある。Yahooのニュースによると覚せい剤が10年前の半値になっているらしい。どの程度の量と回数を使えるかは、薬の値段による部分もある。

図6(葛藤 自己治療モデル)を。

使い続ける人間の中では、どのようなことが起きているのか。「薬を使う」には、そこに何かの葛藤がある。もやもやしているものがないと人は薬を使わない。少なくとも何かを変えたいとか、忘れたいとかそういった葛藤はある。個人の中で抱えてきた課題、自尊心の低さ、みんなの中で認められているか、家族の中で大事にされていたか、自分は大事にされるに値するという感覚が育まれてきたか、そう思っているか、葛藤の背景にはたくさんの心のざわめきがある。足りないことばかりではなく、愛情があっても愛情が苦しくなって薬を使う場合もある。不足や欠落が全てではない。

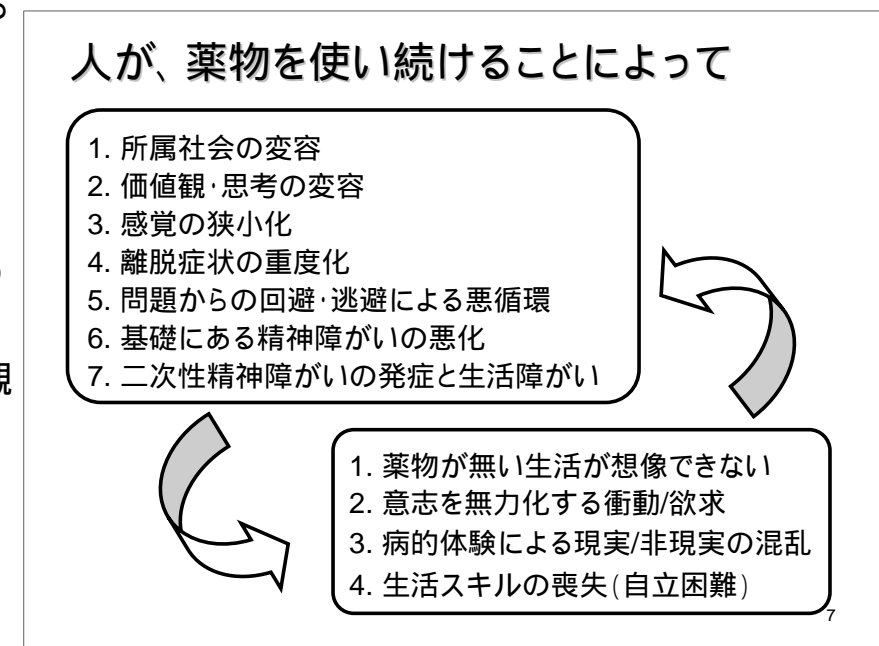


葛藤は、感情を引き出す。その感情は苦痛であり痛みであることが多い。まずは、人は痛みや苦しさからは回避しようとするし、鎮めようとする。それを受け止め乗り越え成長の機会にする場合もあるし、自己治療の手段として薬物に出会ってしまう場合もある。薬の使用で一時的に、葛藤の回避はできる。しかし、薬を使って問題が解消できたと思ったところから問題が複雑化してくる。今まで支えてきた自分のバランスが崩れ、周囲との関係がおかしくなる。そのために、新たな葛藤生まれ、本来の葛藤も増強されてしまふ。強まった葛藤をまた薬で中和しようとする。そうして悪循環にハマってしまう。抱えている問題が大きいほど、悪循環に陥る可能性が高い。

「今の私をどうケアするか」は、本人が引き受けるべき大きな責任であるが、過去からの流れは本人だけの責任ではない。今起きている結果は本人が引き受けないといけないが、全てを本人だけに負わせるのは過酷な気がする。過去からの流れを本人がどれくらい受け止めて、先に行けるかが大事になってくる。

図7(人が、薬物を使い続けることによって)を。

薬を使い続けていると、悪循環に陥る。どんなことが起きるかという、自分が所属する社会が変わる。薬物を使っても問題にならない社会や使える、入手できる環境に身を置くことになる。また、価値観が変わってくる。感覚もだんだん狭まってくる。薬を使っているときの感覚に体が馴染んでいく。



本来持っていた自分の感覚や考え方が麻痺していく。基礎にある精神的な障害が悪化する。一時的には収まっても、二次的な障害が出てきて、生活障害が生じる。こうなってくると、薬物がない生活が想像できなくなる。薬がないと何をどう解決して良いか分からなくなる。無理をして考えようとすると、薬の欲求や衝動が出てくる。頭に負荷をかけると、疲れて、逆に欲求が出てきて使ってしまう。

さらに、脳が病的なバランスで働くことで、現実と非現実が混乱してしまい、すぐに「勘ぐり」が入ってしまう。薬がない生活がうまく想像できなくなる。「できるはずだ」と気合いを入れてみても、空回りしたり、欲求が出てきて、薬を使って動けなくなって引きこもったり、生活自体が本人の思い通りにいかない。

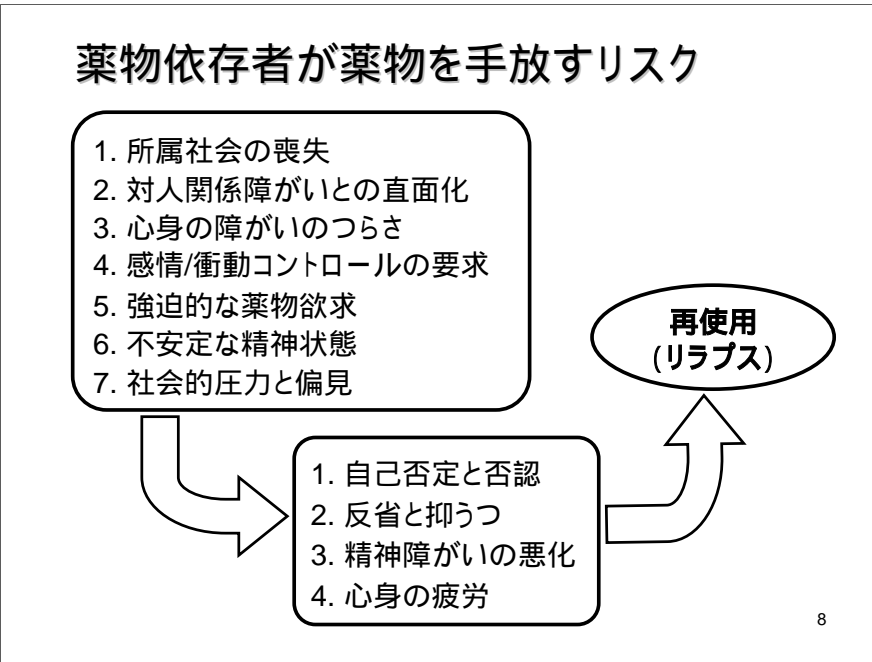


図8(薬物依存者が薬物を手放すリスク)を。

「やめる」といっても、依存者が薬を手放すのはリスクなこと。回復支援の現場では、私は「止めるために死ぬのだったら、むしろ使え」と言う。死なれると生き返らせる技を私は持っていないから、手放すリスクをいつも考えている。

現実問題として、薬を止めると所属社会がなくなる。素面になると今までの社会に住めなくなる。まるで浦島太郎の状態になってしまう。

薬でこじらせた対人関係の問題や障害に直面化しなければいけない。体も痛む。C型肝炎やHIVもある。喧嘩に巻き込まれて怪我をしたり、思ったように体が動かなくなったり。その辛さを受

け止めようと思っても感情や衝動のコントロールがうまくできない。強迫的にコントロールすることを外から強く求められるけど、実際思うように出来ない。強迫的な薬物要求が常にいつ出てくるかわからない。3年くらいはフラッシュバックがバンバン出てくるから、1年くらいはとても危険で不安定な精神状態となる。1年くらいは、まるでジェットコースターのような精神状態で安定しない。社会的な圧力と偏見にもさらされる。「こんな俺は俺じゃない」「俺はダメだ」といった自己否認や否定が必ず起こる。外からのプレッシャーと、自分への怒りとの板ばさみの中で、抑うつ的になる。精神障害が悪化する場合もある。長い間、心身を「休ませる」ことをやっていないから、疲れが自覚できない。「つぶれる」まで休めない。これらの問題を一人で引き受けてしまうと、何とかしようとするが、再使用につながってしまう。

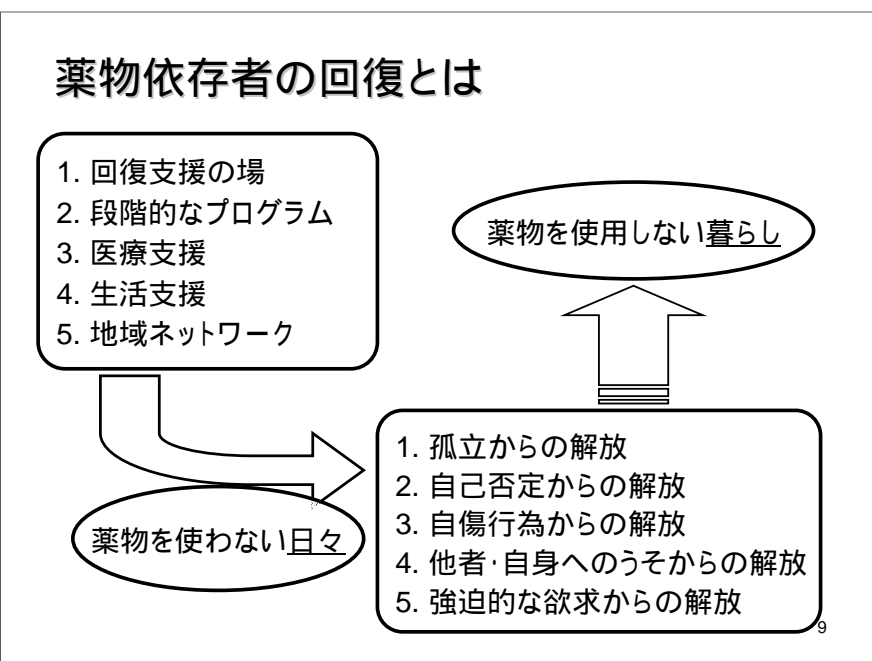


図9(薬物依存者の回復とは)を。

薬物依存者には、薬を手放した瞬間から、幾多の問題・課題が怒涛のように押し寄せてくる。再使用を防いでいく、回復を支援していくというのは、その激しい波に押し流され、溺れぬよう援助を行なうこと。本人を孤立させて反省という強い意志を求めるのは、いかに無理なことか。それでは、薬を使ってしまう。

回復支援の場所があって、段階的なプログラムがあって、プログラムを支える支援者、地域ネットワークがあって、回復つまり初めて薬物を使わない日々が始まる。これはスタートラインに過ぎない。逮捕などは、やっと日常から切り離さ

れて「使わない日々」が始まる回復のスタートにはなり得る。その日々のなかで、自己否定や自分自身を傷つけることから解放され、強迫的な欲求から解放されるというプロセスが、援助を受けながら育まれていく。そのためにも周囲に支えは必要。薬物を使わないようにするのがゴールではなく、薬物を使わない暮らしが出来ることを選び、手に入れる。ただ我慢して過ごすのではなく、薬物を必要としない暮らしと生活を、自分で選ぶ力をつけていけるよう自分自身を支える。そのための支援を受けることを選ぶ。このプロセスを、エンパワメントし続けるのが、サポートの基本であると思う。

家族のための連続講座

薬物依存症と家族の対応について(13)

「回復に必要なもの～ミーティング～」

カウンセラー 町田 政明

今回は回復に必要なものとして、「仲間」「プログラム」「やる気」を取り上げましたが、今回はミーティングを取り上げます。前述の三つは回復に必要な条件ですが、それが全て揃っている場所がミーティングなのです。だからミーティングは絶対に回復に必要なものです。

気がついたら使っていた

病院に入院してきた薬物依存症者にとって、じっとミーティングで座っていることは、とても大変なことです。離脱症状が収まり、一般病棟に戻ったような、薬を切ったばかりの本人は、まずじっとすることが出来ない人が多いと思います。離脱症状が落ち着いても、運動や体を動かしてやるプログラムの方が、依存症者と関係が作りやすくなります。ミーティングでじっとしてもらう事は、依存症者にとって困難な事を要求することになり、彼らへの配慮をしないとすぐ切れたりします。

しかし、退院して社会に戻ると、仲間が居るミーティングに自分の身を置かないと、すぐに再発してしまいます。それは体が薬に乗っ取られているような状態で、いつの間にか薬に手を出してしまうのです。本人は入院して懲りたから使うつもりはなかったが、気がついたら薬を使っていたと言います。

リハビリ施設にいた時にアルコール依存症の人が、「気がついたら自動販売機でワンカップを買っていた」とよく言います。当初は私も「そんな事はないだろう！自分の意志で自動販売機のボタンを押したのだから！」とっておりましたが、そう言ってお酒を飲む人が一人だけでなく、多くのアルコール依存症者が言うので、だんだんと本当なのかと思うようになりました。

今はパチンコ依存症の人がパチンコ店に吸い込まれるというのを聞いても驚かなくなりました。アルコールの人がコーヒーを買おうと思ってワンカップのボタンを押したのと同じだと感じるからです。

ある人はワンカップを買おうと思ってボタンを押したら、コーヒーが出てきてしまい、そのままお酒は飲まないで25年経っている人もいます。その時にワンカップが出ていたら今頃彼は死んでいたかもしれません。ですから薬物依存症の人が、気がついたら薬を使っていたと言っても不思議ではありません。

薬物に乗っ取られている

薬物依存症の人も、最初は薬物を楽しむためか、コントロールしてうまく使うつもりではじめたのですが、だんだんと薬物に自分が乗っ取られてしまい、薬物に支配されます。薬物が一番になって、何より優先するようになり、何か良い事があると薬物、何か悪いことがあると薬物というように、どんな理由でも薬物をやるようになります。その理由は巧妙で家族を巻き込んでいきます。

楽しむための手段のつもりが、薬物をやること自体が目的になり、何が何でも、あらゆる事を犠牲にしても薬物をやろうとします。これが薬物依存症者の心理です。

脳は薬でおかしくなり、薬を止めても妄想や幻覚が続き、じっと座っていることや人の話を聞くことさえできなくなり、体や脳から薬が解毒されて、元の自分らしくなるのには、1年、2年と時間がかかります。本人は薬が切れたら、普通と思うかもしれませんが、まだまだ多くの時間が必要になります。

要するに薬物依存症者は体も心も薬で乗っ取られており、気がついたら薬を使っているように、意志の力で何とかしようと思っても、どうにもならない体になっているのです。

イヤイヤでもミーティングで坐っている

薬物依存症者は体も心も乗っ取られて、自分の意志の力で薬を止められませんが、どういう訳か施設やNAミーティングに出ていると薬は簡単に止まります。

家族の体験記  
好評販売中！

ギャンブル依存症に悩む  
家族の物語  
～絶望から希望へ～

この本には、ギャンブル依存症で悩む8人の家族の体験が綴られています。これは真実の物語です。家族の貴重な体験を知ることができる貴重な一冊です。

定価：1,000円  
発行：ホープヒル  
(アパリで販売中)

ミーティングに出続けている人は、薬を使わずにだんだんと社会の一員としての役割を担い普通の生活ができるようになりますが、ミーティングに出なくなると、どういう訳か必ず再発するのです。

前述のように、薬を止めることは施設やNAに出ているならば簡単に止まりますが、止め続けることが難しいのです。薬物依存症者が薬に乗っ取られている体と心は一生治りません。ですから止め続けるためには、分かっても分からなくても良いから、ミーティングにずっと出続けることが必要です。

頭の良い人は回復しないといひます。頭で理解してしまい、頭でっかちになってしまい分かったつもりになり、ミーティングに出なくなるからです。

また、社会に出て普通のことができるようになると、自分が薬物依存症の障害者であることを忘れてしまい、ミーティングに出なくなり再発します。

自分が障害者であることを、忘れないためにもミーティングに出続けなさいといひません。ミーティングには前号で述べた仲間とプログラムもあります。ミーティングに出続けている人は、回復するというのが統計上の事実です。

双葉社から新刊のご案内

全国書店で発売中！

# 拘置所のタンポポ

日本ダルク代表 **近藤恒夫** 著

このたび近藤恒夫が双葉社より「拘置所のタンポポ」という本を出版しました。近藤は覚せい剤依存者でしたが、今はアパリの理事長、日本ダルク代表として薬物依存者の再起のために活躍しています。

薬物汚染は一般市民社会にもじわじわ広がりつつあります。しかし国は、ごく普通の市民がなぜスリに走ってしまうのかを根本からとらえようとせず、相変わらず「ダメ、絶対」を繰り返します。また薬物に依存してしまう人たちを刑罰で戒めるだけの許しも救いもない国家です。それでは何の解決にもなりません。

近藤は「墮落と再起」の自らの半生を語り、一般人が知らない薬物汚染の実態を語り、酒井法子事件を材料として、人はなぜスリに走るのか、なぜ立ち直るのが困難なのか、どうすれば再起できるのか、そして我々は何をなすべきかを語り、依存症国家・日本への警鐘を鳴らします。人はいかに弱く、しかし、いかに素晴らしいかを教える感動の書です。

書名は、拘置されていた札幌拘置所で、雪にも負けずにけなげに咲いていたタンポポを見つけて再起を誓ったというエピソードに基づいています。

ぜひご一読ください。

## 目次

- プロローグ のりピー、ダルクへおいでよ
- 第1章 絶頂からの転落～そして再起 わが波乱の半生
- 第2章 誰が、なぜ、ヤク中になるのか
- 第3章 あまりに知られていない覚せい剤の世界
- 第4章 なぜ薬物依存者は立ち直りにくいのか
- 第5章 立ち直るためにはどうすればよいのか
- 第6章 新生した仲間たち
- エピローグ 私たちの未来

発売：双葉社 定価1,400円（税別）



**【近藤恒夫プロフィール】**  
 1941年秋田県生まれ。日本ダルク代表。  
 72年、覚せい剤におぼれ、78年、精神病院に入院、80年に覚せい剤取締法違反で逮捕、札幌地裁で有罪判決を受ける。再起を誓い、85年、薬物依存者のための日本初の民間リハビリセンター「ダルク」を創設。薬物依存者の社会復帰を応援する一方、啓蒙活動を続けてきた。アジア太平洋地域の国々の依存症問題に取り組むNPO法人アパリも創設（理事長）。  
 1995年 東京弁護士会人権賞受賞  
 2001年 吉川英治文化賞受賞。

この本は、海拓舎発行の「薬物依存を越えて」（近藤恒夫著）を元に全面的に加筆・改稿したものです。

### < 拘置所のタンポポ お申し込みの方 >

ご住所、お名前、お電話番号をご記入の上、下記のFAXあるいはメールにてお申し込み下さい。  
 FAX：03-5830-1791  
 メール：info@apari.jp

定価：1,400円  
 （送料はご負担いただきます）

## アウェイクニングハウス 入寮者からのメッセージ

### 「わたしにとってのダルクとは」

ヨッシー

こんにちは。私は現在群馬県にある日本ダルクアウェイクニングハウスに入寮している、ヨッシーです。まず、私の過去から遡って話を進めていきたいと思います。

私は幼い頃からアスペルガー症候群があり、発達障害の為に学習障害に陥り、学問に励めず、サラリーマンの父親は家を離れ愛知県に単身赴任をしていた事から非行に走り、高校に入学したものの2年生で中退をしてから、社会という荒波に揉まれて生活してきました。

中学は地元の埼玉でしたが、高校は都内だったので、日曜日には、原宿に行きロックンローラーのグループに参加して夜は渋谷の街をふらついていたのですが、高校中退後は、地元の埼玉大宮の暴走族に入り不良の先輩達と色々、悪い事をしてきました。その中のひとつとして薬物使用があったのです。

初めは煙草、その次はアルコール、そしてシンナーへと進み、不良グループとのつながりが深くなってゆくにしたがって品行劣悪な人脈が増えていき、10代でありながらも暴力団とのつながりもできてくるようになり、違法薬物の入手ルートが確立されてくると、マリファナ、ハッシシ、そして覚せい剤へと進んでいきます。

しかし、私の場合、好奇心が強かったから薬物依存に陥ることにより、お金を稼いで自分の好きな事をしていたり、ほしい物を手に入れるという考え方のほうが強かったので、10代のころは水商売でしたが、20代になってからは高学歴で学識のある暴力団幹部の若い衆になり、大金の動く不動産関係の仕事に従事するようになりました。この仕事は22歳から始めて2年間の下済み経験をした後、兄貴分の信用を得、出資してもらえることになり、企業舎弟という形で貸金業の会社を設立して、仕事に没頭していったのです。

しかしながらこのように仕事に従事していながらも仕事上の付き合いからアルコールを飲むことが多く、ストレスが溜まると遊び感覚で覚せい剤に手を出していたので違法薬物との関係を断ち切る事は出来ませんでした。その為に仕事上での知識不足が元で挫折感を覚えた時は、悔しくて勉強に励みましたがヤケになってアルコールと覚せい剤にハマる日もありました。

最初の逮捕は25歳の時。自分の女房に薬物使用を打ち明けたところ、女房が警察に通報したためガサ入れが入り逮捕。この時は執行猶予でした。

この女房との間には生まれたばかりの子供が居ましたがその後、女房の浮気が発覚したのですぐに離婚しました。その為に購入したばかりの家も手放す事になりました。

しかし自分は？という逮捕されたからといっても違法薬物を止める事は出来ませんでした。どうしても仕事上のストレスや挫折感を感じると薬物を使用してしまう癖がついてしまったのです。

そのような問題を抱えていた私に突然の不幸が重なります。仕事上で詐欺にあったことから自分で処理できない問題を抱え、莫大な借金を作り、会社が倒産した為に生活苦になり、2回目の離婚をしてしまい、2人目の子供とも離ればなれ・・・

この為に賃貸マンションを引き払う事になり、実家へと戻ったのですが更に追い討ちをかけるように実家が火災で全焼してしまった為に自分の全財産、損害額にすると2千万円以上の損失を被りました。火災の原因は漏電でした。

この度重なる不幸で私は大きな絶望感を抱え、完全に挫折をして自暴自棄に陥り、どっぴりとアルコールと覚せい剤にのめり込んでしまい自滅・・・

実家の火事から1週間もしないうちに2度目の逮捕。私は30歳にして刑務所に入る事になりました。初入であるにもかかわらず、暴力団関係があったが為に再犯刑務所へ投獄された私は辛い受刑生活の中、苦しい思いをし続ける日々であったことを今でも思い出します。

### 薬物依存を のり越えて



薬物依存、摂食障害、援助交際の体験談をインタビュー形式で毎日新聞の和田明美さんがまとめたものです。また専門家の話やダルクのこと、受刑者のグループミーティングについても書かれています。

10冊以上お買い求めの場合は2割引になりますので下記にお申し込みください

akemi.wada@kve.biglobe.ne.jp

和田明美宛

和田明美著

新水社刊

1,365円

全国書店で発売中！



しかしながら刑務所を出所しても火災で被った被害が元に戻る筈もなく、実家は火災保険で建て直しが出来たものの、自分が買い揃えた家具や電化製品はおろか着る服すらも無くなっている現実を再び目の当たりにし、再びやる気をなくし、現実逃避する為に薬物を再使用。その時は私の父親がそんな息子の姿に悲嘆し、警察に通報した事から3度目の逮捕。

自分も自分自身に呆れたことから何とか改善策を探そうと受刑生活の中で考えに考え、刑務所出所後に自ら精神病院に入院しました。そこで初めて『薬物依存症』と診断されたのですが薬物依存症という病魔はそう簡単に根治する病気ではありません。精神病院に入院してもNA(ナルコティクスアノニマス)という自助グループを利用して私の心の中に巣食う病魔はおさまらずに再燃しました。

火災による心の痛手はPTSDとなって脳裏に幻影を映し出すようになってしまい、拭いきれない障害を作り出してしまったのです。

そんな心の傷を癒す為に再び薬物を使用するようになり、見るに見かねた父親が再び警察に通報したことから4度目の逮捕。もう自分ではどうする事も出来ませんでした。

その上、刑務所に服役中に、薫陶を受けていた自分の兄貴分が病死……。すべてを失った私は心の拠り所を見失い、3回目の刑務所出所後にダルクの扉を叩いたのです。

私が初めて相談を持ちかけたダルクは地元の埼玉ダルクでしたが、当時、埼玉ダルクは通所制だったので、精神病院に入院して処方薬を調整した後、長野ダルクに入寮しました。

そして紆余曲折はあったものの、長野ダルクで1年間プログラムを受け続けてスタッフ研修を受け、スタッフの仕事に就いて生活していました。長野ダルクでの生活は1年9ヶ月でした。自分が社会で生活できるという自信がついてから、自主退寮をして地元の埼玉に帰って来ることが出来、アルバイトから仕事を始め、生活の立て直しを図り始めたのですが、社会に出てみて気付く事があったのです。

それは、先ず、対人関係の改善の問題です。覚せい剤を使用する悪友との関係は疎遠関係を作る事は出来たのですが、アルコールとなると違法薬物ではないが為、自分でも気のゆるみが出て、アルコールを喫する旧友との関係は縁を切る事が出来ず、また仕事上の付き合いからアルコールを飲む機会もあった為、2年4ヶ月のクリーンタイムを投げ捨て、アルコールでスリップしました。その上、薬物依存症の後遺症である幻聴に悩まされることになり、仕事が手につかなくなり、再び精神病院に入院。

自分の病気の深さを改めて知り、再び埼玉ダルクに相談を持ちかけ、自己改善を計る目的で、日本ダルク・アウェイクニングハウスへの入寮を決めたのです。そして、現在、再びダルクのプログラムを受け続けて3ヶ月が経ったところです。

ダルクという施設がなければ、私は自殺をしていたか、再び塀の中で生活していた事でしょう。初めて刑務所に投獄されたのが、30歳の時で、ダルクに繋がるまでに3回の受刑生活と2回の精神病院を繰り返して9年という筆舌に尽くしがたい長い年月を違法薬物の使用で無駄にしました。その上、1年9ヶ月の長野ダルク入寮と再びの精神病院入院、そして日本ダルク・アウェイクニングハウス入寮。その為に、現在は43歳になりました。

薬物依存症は本当に人生を変えてしまう病気です。本当に辛いです。

しかし、今は、薬物を止めたいと願う多くの仲間との交流を持つに至り、回復への道を楽しめるようにまでなりました。ダルクという施設は、私たち薬物依存症者には必要不可欠な存在です。自分の病気と向き合いながら、これからもダルクの利用は続けていくつもりです。薬物依存症は一生治らない病気と言われていますから、再び過ちを起こす危険性もあるからです。ダルクでは、本当に病気に対しての勉強をさせてもらっています。

このような考え方になれたのもダルクのプログラムを受けたからです。ダルクがなければ今の私はありません。これからもダルクを支援して頂き、私たちの回復を見守って下さい。

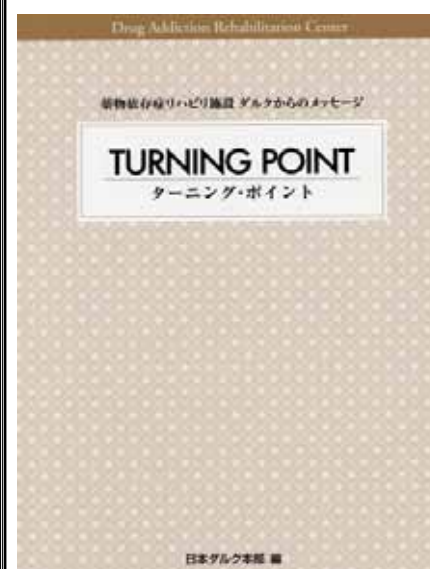
そして、まだ苦しんでいる薬物依存症者の方、一度ダルクの扉を叩いてみて下さい。

今までと違った人生観を持つ事が出来るはずです。

頑張りましょう。

## ターニング・ポイント

受刑経験のある  
ダルクスタッフによる  
最新の体験談  
12名の体験談と漫画  
体験記が載っています  
1,000円



ご希望の方はご住所、お名前、電話番号をご記入の上お申込下さい。

FAX : 03-5830-1791

メール: info@apari.jp



## 藤岡ニュース！



こんにちは、日本ダルク アウェイクニングハウスの山本です。

皆様、新春明けましておめでとうございます！！ここ山の上も寒い日が続いております。年末年始といろいろなイベントが控えており、仲間たちも忙しく動きまわっています。

さて、去年一年も振り返るといろいろな事がありました。私事ではこの一年に海外に行く機会がたくさんありました。フィリピン、韓国、スペイン。やはり、どの国でも薬物の問題は深刻です。特にフィリピンでの貧困層における問題、韓国での薬物依存者に対する社会の受け入れ等、それぞれの国によって抱える様々な問題があると実感しました。しかし、そんな中でも一生懸命に回復に取り組んでいる仲間や支援をしている地域の人々の姿を見て勇気づけられました。日本も今年は芸能人の薬物問題がクローズアップされましたが、これも氷山の一角であり、問題は深刻化していると思います。そんな中、ダルクの活動も忙しくなっていますが、今年も私たちがやることは「仲間の手助け」だけです。毎年多くの新しい仲間が繋がってきますが、出来るだけたくさんの仲間たちが回復の道を歩めるよう私たちスタッフは「仲間の手助け」をして行きたいと思っております。

今年一年もどうか私たち日本ダルク アウェイクニングハウスの活動にご協力、ご賛同お願い申し上げます。

去年からの引き続きですが、ご家庭の倉庫に眠っている楽器で使用出来るもの（特にトランペット、トロンボーン、木琴、弦楽器、etc.....）があったら是非ご献品をお願いします。それから、中古でも構わないので、布団の献品もお願いします。

**連絡先：0274-28-0311日本ダルクアウェイクニングハウス**  
どうか宜しくお願い申し上げます。

<2009.11月～2009.12月現在までに献金をいただいた方>  
小原幸江様、藤原トモ子様、大須賀克爾様、匿名の皆様

<2009.11月～2009.12月現在までに献品をいただいた方>  
安富幸子様、藤原トモ子様、奥田総合法律事務所 奥田保様、宗方涼様



12月の行事（フェローシップ）でしゃぶしゃぶ食べ放題と桜山温泉に行ってきました！



藤岡の施設も、みんなで飾ったイルミネーションがキレイです。



## 東京本部より



### フィリピンプロジェクト 活動報告

2009年12月5日～10日まで、近藤理事長、神山理事、プロジェクトメンバーの三浦がマニラに行ってまいりました。マニラとマリキナ市は10月の集中豪雨のため、壊滅状態になりました。5時間で1年分の降雨量を観測したそうです。

今回の渡航は、現地でもアパリミーティングが開けるのか、1月にプロジェクトを進めるための現地派遣が可能であるか確認するため、これは当初の計画にない私的な視察でした。その結果、今年1月17日から7日間、現地に3名派遣することになりました。

12月9日、カウンターパートのファミリー・ウエルネスセンターの10周年のセレモニーとクリスマスパーティーを兼ねた盛大なイベントが開催され参加してきました。参加者は60名位でスピーチやゲームなどでとても盛り上がり、楽しいパーティーになりました。

ファミリー・ウエルネスセンター代表のリッチー氏の父親の別荘やマニラ市内の色々な場所へ案内され、観光する時間ももつことができました。

写真左はパーティーの様子。

写真右はホテルの庭でくつろいでいる近藤。



関東エリア

MAC & DARC 2009  
クリスマスパーティー

2009年12月21日(月)18時から文京区民センターで毎年恒例のクリスマス会が行われ、関東近郊のマック、ダルク約10施設が集まりました。

山梨ダルクの出し物では、衣装に大金(18万)をかけていたようで、クスリでお金を使わず、こういふことにお金をかけると近藤に教わったと施設長が挨拶していたのが印象的でした。

アウェイクニングハウスはゴスペル風のノリのいい歌を披露していました。スタッフのジークがリードボーカルを努め、みんなと呼吸を合わせ体を動かしながら歌っていました。

合唱やハンドベルなど多くの出し物があり、終了時間ギリギリまで熱唱し、とても活気のある楽しい会になりました。



静岡エリア

静岡地区ダルク合同  
クリスマスパーティー



2009年12月23日(祝)13時からマリアの丘クリニックにてこの地区では初めてのクリスマス会が行われました。スルガダルク、静岡ダルク、奈良ダルクから仲間が集まり、また藤岡のアウェイクニングハウスから琉球太鼓での参加があり、5名の仲間が太鼓を叩きました。スルガダルクのパラパラの踊りでは静岡県立大学の学生さんたちも一緒に参加して踊っていました。

オードブルに手作り料理、ケーキやお菓子など食べきれないほどのご馳走が並んでいました。豪華景品が当たるラッフルでは、一番最後のDVDプレーヤーのときに最高に盛り上がりを見せました。

「2010年 回復パレード」

前号でも紹介しましたが、今年の9月に東京で依存症からの回復者や途上者、家族、関係者が回復を祝い、回復の事実を知ってもらうためのパレードをやる！という企画があります。これは、アディクションなどのさまざまな障害に対する社会の偏見を取り除くために、当事者が中心になって、家族や関係者とともに動こうという新しい理念にもとづく運動(回復擁護運動)です。

このパレードにはコーラス隊RPJ(Recovery Parade Japan)やダルクによる琉球太鼓隊が結成され、パレードを盛り上げようとしています。回復という一点で一致する個人、グループ、団体が一緒になってパレードを実現するために、さまざまな活動が始まりました。昨年12月28日には、実行委員会設立のための準備会が開催されました。

この関連のニュースは今後も本紙面で紹介する予定です。

以下がURLです！

<http://recoveryparade-japan.com/>

ドラッグ・ダイヤル

最近若い人からの  
大麻の相談が増えて  
います

こんな質問が多いです。  
「何で大麻はダメなの？」  
「どんな害があるの？」  
「止めようと思うんだけど  
どうすればいいの？」

どうぞお気軽にご相談  
ください。  
(プライバシーは固く  
守られます。)

電話相談は  
月～金の10時～18時  
: 03-5830-1790

メールでの相談は随  
時受け付けていま  
す。  
メ-ル: info@apari.jp

2010年2月19日～  
21日

処遇プログラム研修  
第3回薬物依存症者回復  
支援セミナー開催！

1月中にアパリのホーム  
ページでご案内します。

お申し込み・お問い合わせ  
: 075-645-2040  
[http://www.apari.jp/npo/pdf/  
dars2.pdf](http://www.apari.jp/npo/pdf/dars2.pdf)

会場: 龍谷大学・ともいき  
荘(京都)  
参加費: 3,000円  
主催: 龍谷大学・矯正保護  
研究センター



特定非営利活動法人  
アジア太平洋地域アディクション研究所

**アパリ東京本部**  
〒110-0014  
東京都台東区北上野2-2-2 1F  
電話：03-5830-1790  
FAX：03-5830-1791  
Email：info@apari.jp

**アパリ藤岡研究センター**  
(運営：日本ダルク アウェイクニングハウス)  
〒375-0047  
群馬県藤岡市上日野2594番地  
電話：0274-28-0311  
FAX：0274-28-0313

- 【入寮条件】  
1、薬物依存から回復・自立しようとしている本人  
2、男性(年齢制限なし)  
【入寮期間】  
基本的に13ヶ月  
【入寮費】  
月額16万円(初回17万5千円、生活保護の方も可能)



ホームページもご覧ください  
<http://www.apari.jp/npo/>

発行者：近藤恒夫  
編集責任者：志立玲子  
平成22年1月1日発行  
定価 1部 100円

**<アパリの司法サポート> アパリの支援**

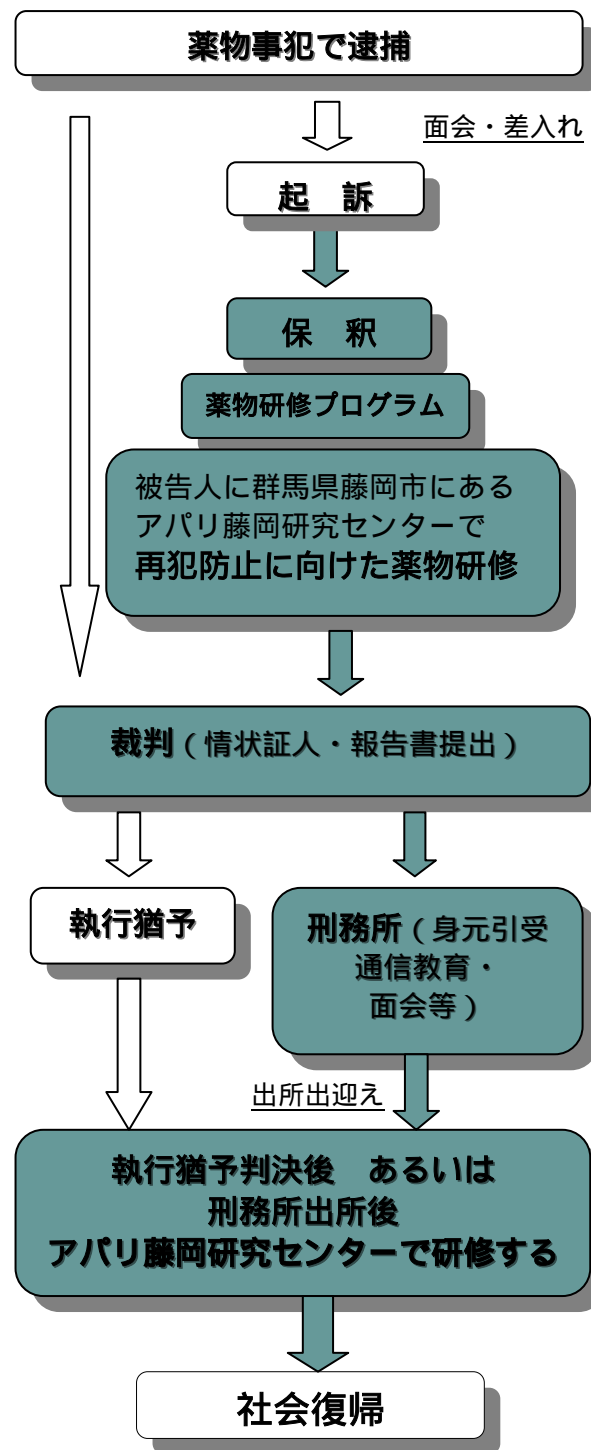
《薬物事犯で逮捕された刑事被告人に対する支援》

薬物犯罪で逮捕されたら刑務所に行くか、再犯防止に向けた何の取り組みもないまま執行猶予の判決をもらって、また薬物のある日常に戻るしかない日本において、**はじめて刑罰以外の再犯防止に向けた取り組みです。**

保釈中の刑事被告人に対する薬物研修プログラム、情状証人出廷、上申書作成、入寮契約、身元引受契約、出所出迎え、法律相談などあらゆるニーズにお応えします。なお、日本における薬物事犯の再犯率は50%ですが、アパリの司法サポートを利用された方の再犯率は**10%以下**です。最近では特に、**受刑中に身元引受契約をし、仮釈放又は満期釈放の時に**出迎えに行き、リハビリ施設に繋げるお手伝いをしています。

[費用：コーディネート料として一律20万円。但し、東京以外の地域は交通・宿泊費の実費が必要です]

【お問合せは東京本部まで】



**<家族教室>**

**「エクステンディッド・ファミリー・クラブ」**

日時	テーマ	ファシリテーター
1月4日(月)	新しい生き方	町田 政明
1月18日(月)	良い依存、悪い依存	町田 政明
2月1日(月)	家族神話(家族ならば.....)	町田 政明
2月15日(月)	回復という奇跡	町田 政明
3月1日(月)	ハイパーパワーについて	町田 政明

【対象】薬物依存症などの諸問題を抱える家族、知人、友人、援助職従事者  
【日時】第1・第3月曜日18:30~20:30(祝日も開催します)

【場所】アパリ・クリニック上野2階【参加費】3,000円(ご夫婦などでの参加は2名で4,000円になります)【内容】カウンセラーの町田がファシリテーターとなり家族との分かち合いを行います。法律問題については事務局長の尾田が担当します。【お問合せは東京本部まで】

**<個別相談・カウンセリング>**

【対象】薬物依存症などの諸問題を抱える家族・本人など 【料金】45分 9,000円  
【場所】アパリ東京本部 【カウンセラー】町田政明[元神奈川県立せりがや病院勤務、ホープビル代表、寿アルク理事] 【予約】アパリ東京本部 03-5830-1790 【注意事項】当日のキャンセルや変更の場合は全額いただきます。遅れていらした場合は時間が短くなりますのでご了承ください。